学力づくりの最前線！

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス http://gakuryoku.info/

NO. 359

2025. 2. 1

学力研発行

常任委員長 岸本ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

「メモやノートを詳しくとればとるほど学びは大きい」と思っている人は多いでしょう。それは、中学、高校の学校の授業の場合は正解です。重箱の隅をつつくような問題が試験に出るからです。しかし、セミナー受講の場合はまったく逆です。

セミナーでは、**自分の行動を変えるような「気付き」**をいくつか持って帰ることが重要です。すべての内容を書き留めることも、すべての内容を記憶する必要もないのです。

セミナーのメリットは、本を読むことでは受け取れない「非言語情報」を受け取ること、とお伝えしました。つまり逆にいうと、「非言語情報」を受け取ることが、セミナーの目的なのです。

※樺沢紫苑『学び効率が最大化するインプット大全』(2019.8サンクチュアリ出版) より。

学力研では、様々な講座やセミナーを一年間で20回以上、企画しています。

今回の広場の特集は、「講座での学びの活かし方」です。

ぜひ、学力研の講座やセミナーにご参加ください。そして、せっかく参加されたなら、そこからの学びをご自身の実践や成長につなげてください。

やがて、あなた自身が講座やセミナーで話す立場となるかもしれませんね。（荒井）

CONTENTS

◇特集　講座での学びの活かし方◇

私の講座の活かし方　宮本　哲・・・・・・・・・・　2
講座と人の話は聞きよう次第である　丸小野聡暢・・・・・・・・・　4
インプット＆アウトプット　加藤英介・・・・・・・・・・　6
オンライン講座、対面講座について　鈴木基久・・・・・・・・・・　8
学力研の講座には、なぜ教育観や人生まで変える力があるのか　吉田雅直・・・・・・・・・・10
学んだことを自分に活かす　根無信行・・・・・・・・・・12
学びの多い「講座」とは何か～４つの特徴　図書啓展・・・・・・・・・・14
活かせる「学び」と、活かせない「学び」　岸本ひとみ・・・・・・・・・16

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える⑯「意欲格差」に負けない！公立小学校へ　岡本美穂・・・・・・・・18
考える力をつけるための授業の組み立て方⑱　選択させ理由を考えさせる　荒井賢一・・・・・・・・20
酒井邦嘉著『デジタル脳クライシス』―ＡＩ時代をどう生きるか（朝日新書）の紹介　金井敬之・・・・・・・・22
第18期・学力研・先生のための学校・第５回の報告　李　詩愛・・・・・・・・24
局長・常任委員長だより　・・・・・・・・26
学力研カレンダー　・・・・・・・・・・・27

私の講座の活かし方

大阪教育サークルはやし　宮本哲

「今までの講座を振り返って」

教師になって三月で二十六年を終えようとしています。多くの講座を受けてきました。学校や教育委員会が主催する官制研修。民間の団体が主催する研修。前者は、無料。後者は有料。やはり私も自分で参加料を払っているので民間団体の研修の方が真剣に聞いていました。また、同じ先生でも官制研修は、言葉や話題を選びながら話しておられたように感じ、堅苦しく、その先生の人間性が見えにくかったので好きではありませんでした。だから、年齢を重ねるごとに官制研修からは、足が遠のいていきました。

教師の経験年数によっても受ける講座の内容が変わってきました。教師になりたての頃は、同じ学校の先生に勧められた講座に何も考えずに参加していました。参加するだけで、学んだ気になっていました。

講師を数年経験し採用試験に受かり初任校で何年間か過ぎ、学年主任や体育主任を任されていました。教師の仕事を一通りできるようになったと錯覚をしていた頃です。この頃は、先輩の先生に勧められて講座に参加することもありましたが、あまり参加していませんでした。学級崩壊した後のクラスや誰も持ち手がいないクラスを持ち続けていたので自分ができると勘違いしていたのでしょう。今考えると、この時、もっと学ぶべきだったなと少し後悔しています。

その後、教諭になってから初転勤となりました。新しい学校では、三月の後半に校長と面談がありました。この面談は、約一時間半、その学校の昨年度にあった大変な出来事についてひたすら話されるだけのものでした。大変な学校に転勤したなとは思わず、どちらかと言えば、どうすれば、学校が良くなるのかなと考えていました。この頃から自分が学びたい講座を見つけて行くようになりました。(この頃から学力研の講座にも参加するようになりました。)その後は、色々な団体が主催する講座に参加しました。一年間に五十回以上は毎年参加するようになりました。たくさん参加していく中で、今の自分に合っている講座には何度も参加しました。

このようにコロナ禍以前は、たくさんの講座に参加していましたが、コロナ禍になりオンライン授業になってからは、ほぼ参加しなくなりました。オンライン講座は対面の講座に比べると、講師の先生の熱量や空気感などを感じにくく物足りなさを感じたからです。

今は、少しずつ対面の講座も増えてきているので参加するようになりました。

「講座の生かし方」

これまで講座を受けてきて、私がしてきたこと（これが良いかどうかは分かりませんが）を書いていきます。

【講座に参加する前】

①書籍を購入

講座の申し込みを終えると、一、二冊、

講師の先生の書かれた書籍を購入し読むようにしていました。先に読んでおくことで講師の先生の考え方や実践を知ることができました。また、実践の細かなところで分からないことがあれば、講座の後で質問することもできました。

②インターネットで調べる

インターネットで講師の先生の経歴を簡単に調べていました。

【講座に参加している時】

①ノートにメモする

講座中は、少々乱雑な字でもできるだけノートにメモしていました。

②書籍を購入

講座の休憩時間に講師の先生の書籍が販売されていれば購入していました。(もう少し詳しくその先生のこと、実践が知りたいと思った講師の先生)

【講座に参加した後】

①書籍を読む

講座の時に購入した書籍をできるだけ早く読むようにしていました。読んでいると講座の内容と同じようなことが書かれていて、良い復習にもなりました。

②メモをワードに残す

講座に参加したその日か次の日、出来るだけ早く講座でノートにメモしたことをワードに残すようにしていました。ワードに残す時、その日、もしくは前日に受けた講座の内容なのに詳細なことを思いだせないところもありました。

打ち込んでいる時に疑問に思うところが出てきたり、もう少し詳しく知りたいところが出てきたりもしました。疑問や知りたいことは、インターネットで調べたり、書籍を読んだりして分かった事は、ワードに書き込んでいきました。

③書籍を購入

講座を受けて私がいいなと思った講師の書籍は昔の書籍も含めて購入しました。絶版になって購入できないものは、アマゾンで探して購入しました。アマゾンでもない時は、ブックオフでその本が入庫したら連絡が来るようにしていました。

④書籍を読む

購入した書籍は、その講師の次の講座がある前までにできるだけ読み終えるようにしていました。読書→講座→読書、この繰り返しをしていました。気に入った本は何度も繰り返して読みました。

⑤学年・学校内で話す

学んだことが、今すぐに使えそうだったり、学校の課題解決に繋がったりする時は、学年や校内研修で伝えていました。私のアウトプットにもなるので良かったです。

「私の失敗」

講座を受けた後は、私も講師の先生のようにできると勘違いしてしまいます。(アクション映画を観た後、自分も強くなったと錯覚するような感じで。)

講師の先生は、毎日の小さな成果の積み重ねて、子ども、集団を育てています。だから子どもの思考力、発言力、行動力が育っています。講座で聞いたらそれがすぐできると勘違いして私のクラスでも同じようにやってみると全然、講師の先生のようなクラスのならないということが何度もありました。やはり、子どもの今の子どもたちの実態をつかみ、日々少しずつでも伸ばしていくことが大切だと何度も思いました。(失敗から学ばず何度も失敗しました。)

講座と人の話は聞きよう次第である

丸小野　聡暢

講座の選び方

先生方は、どのように講座を選んでいますか。コロナ禍の中で、無料のオンライン講座が増え、気軽に参加することができるようになりました。私は、大分県に住んでいますので、オンライン講座が増えたことはとても有難く思っています。地方では、対面講座だと数や種類も少なく、選ぶことができないからです。コロナ禍の前は、対面講座が基本で、自分で出向いて参加していました。当然、移動時間と旅費が掛かりますから何度も参加はできません。その中、学力研に出会い、一緒に学ぶことができ、このように広場や講座で自分の考えを発信させていただくことに感謝しています。

私が講座を選ぶときのポイントは期待感です。講師の方や著書、講座のタイトル、知り合いの紹介等で、話を聞いてみたいという気持ちになるかを大切にしています。

講座の活かし方

私は講座を様々な方法で活用しています。まずは、自分の活力にするためです。講師の方の話を聞くと「明日から子どものために授業を頑張ろう」「子どもの力を伸ばしたい」という気持ちになります。講座とは別になりますが、私は地元で算数サークルに所属し、月に1回学習会に参加しています。お互いに実践を持ち寄りますので、学年や進度が異なり、そのまま追試することは難しいですが、数理を追求する喜びや授業展開の考え方が深まります。学習会後は、いつも「早く算数の授業をしたい」という気持ちになります。講座でもサークルでも、学ぶことが、私の原動力になっています。

若い頃、講座で聞いた実践をそのまま追試していましたが、上手くいきませんでした。それでも何とか形にしようと躍起になっていた気がします。上手くいかなければ、別の実践を行うという繰り返しでした。継ぎ接ぎのパッチワーク状態です。今、振り返ると上手くいかない理由は明確です。その授業を行うための子どもやクラスの学習規律を育てられていなかったからです。学級づくりと授業づくりは密に関係していますが、その時は、授業展開や教材にしか目が向いていませんでした。現在は、4月に子どもの実態を見た上で、授業を行うために子どもたちを育てています。

次に、講座に参加するときは、聞き手である私自身の問題と捉えて話を聞くようにしています。実践が追試できるのかではなく、どうしてそのような実践を行っているのかと実践の理論や講師の方の教育観を聞き逃さないようにしています。実践のハウツーだけを取り入れるとだと若い頃の失敗の繰り返しになります。講師の方がその実践を行っている背景を知ると、自分のクラスに合うのか、どこをアレンジすればよいかが分かり、取り入れやすくなります。

学力研の百マス計算を例に挙げてみます。百マス計算については説明をしなくても、皆さんも一度は行ったことがあるのではな

いでしょうか。ただ、学力研が生みだした実践であることは、あまり知られていないと思います。学校のスキルタイムなどで活用されることが多く、私も学力研の実践とは知らずに行っていました。百マス計算は、何も考えずに使えばただの計算練習です。しかし、活用方法を知っていれば、子ども同士をつなげたり自己肯定感を高めたりすることができます。タイムを計ることで昨日の自分に勝ち成長することを目的にしたり、丸つけをペアの子と行ったりすることで有意義な取組になっていきます。実践を追試する時、どのような目的で取り組むのか、先生方の考え方次第で子どもの成長が変わってきます。

最近は対話型の講座も多いですが、私は講義型の講座の方が好きです。文科省が学習定着率をラーニング・ピラミッドで表しています。その中で、「講義を聞く」はピラミッドの頂点にあり、学習定着率は５％と一番低く、「人に教える」が９０％と一番高くなっています。先ほども書きましたが、講座は聞き手の問題であると考えています。私は、話を聞くときに批判的に聞くように心がけています。そうすることで、脳が活性化していきますし、「本当にそうなのか？」という疑問が生まれます。疑問が生まれたら、自分だったらどうするだろうと考え始めます。自分のクラスに当てはめて改善したり、新しい考えが生まれたりします。そのため、私のノートのメモは、キーワードと講師の方が話していない内容を書いていることが多いです。

最後は、全国の教育情勢を知るために講座に参加します。この時は、文科省が発信しているキーワードから講座を検索します。講座に参加しないと、書籍を買うにしてもネットで調べるにしても、どうしても自分の興味のあることにしか目が向かず、自分本位の学びになってしまいます。そうすると、考え方が凝り固まってしまい、柔軟に物事を考えることができなくなるからです。職場には、多様な教育観を持った先生方が集まっています。その先生方とともに子どもたちを育てていくわけです。何も知らずに、自分の考えが正しいと主張を押し通すわけにはいきません。しっかりとアップデートしていく必要があります。情報を得るための講座は、オンライン講座を活用することが多いです。無料の講座を含め、いくつか違う講師や団体の話を聞くようにしています。それは、情報の偏りを避け、さまざまな視点で情報を捉えるためです。

学びにならなかった講座

たくさんの講座に参加してきましたが、残念ながら学びにならなかった講座もあります。それは、講師の方の話に中身がないときです。最近は、ＳＮＳで講座の告知が多くあります。タイトルやチラシで、ＳＮＳ映えしていても、話を聞くと講師の方に信念や理念を感じないことがあります。また、自信満々に話されていることが、現場の教育活動を抜きに話されている場合です。理想を持つことは大切ですが、文科省の最新の言葉だけを切り取って、現場や子どもを抜きにして自分の名声や利益だけを求めている講座はすぐに分かります。このような講座は残念な気持ちになります。講座は参加してみないと良し悪しが分かりませんが、普段からアンテナを張っておくことや聞き方次第でうまく活用していくことが、自分の学びにつながっていくと思います。

インプット&アウトプット

加藤　英介

はじめに

教師になって3年目。学級がうまくいかず悩んでいた時、初めて学ばせてもらったのが学力研だった。講座を聞きながら、とにかくメモをして忘れないようにした。講座が終わっても個人的に質問したり、話を聞いてもらったりした。そして、次の日には、すぐに実践をした。百マス計算にリズム漢字、かっ飛ばせ都道府県など、すぐに効果が出るものもあれば効果のないものもあった。効果がなかったものは、教材が悪いわけではなく自分の力量が足らないだけだと思い、試行錯誤を進めた。毎日少しずつ改善しては失敗し、少し上手くいったと思えば次の日には上手くいかないということを繰り返しながら積み上げてきた。講座では、インプットしたことをすぐにアウトプットすることが重要である。学校だけでなく、様々な場で実践し、交流することが最大の活かし方である。

研修・講座の捉え方

校内研修・校外研修・セミナー・自主研修など、あらゆるところで研修や講座はある。自主的に行く研修もあれば、行きたくないのに行かされる出張や研修もあるだろう。あまり乗り気ではない講座や研修中の場合、寝ている人やスマホをいじっている人、明らかに機嫌の悪い人などもいる。実際に自分自身も全ての研修が前向きに受けているかと言われればそうではない。自分の苦手な分野や話の内容が専門用語ばかりの講座では思わずため息が出てしまう時もある。そんな時に考えるのは、目的である。研修の目的は何だろうか、誰がどんな意図をもって開催したのだろうか、ということである。

公務の場合は、出張費や時間、講師料など必ずどこかで誰かが動き、お金が発生している。そのお金の出どころは自分の給料の一部であることもある。このようなことを考えたら、聞くことによるメリットの方がはるかに大きいだろう。また、自分自身は特にこれといって得意なことや人よりも秀でているものがない。だからこそ、周りが聞いていない時にこそ聞く価値があると思いメモをしている。

さらに、最近意識していることは、内容以上に講師の方の話し方や雰囲気の作り方、反応の仕方といった講座の流れである。プレゼンテーションの内容やプリント、ノートなどは見返すことができるが、言葉と言葉の間にある何気ない言葉の数々は意識をしていないとすぐに通り過ぎてしまう。百マス計算を例に紹介する。

手段と目的

百マス計算の講座を聞いた時に自分がメモをした内容は以下の通りである。

- 百マス計算は授業開始すぐに行う。
- 足し算から順に行い5分程度で取組。
- タイムは教師が測る。
- 記録カードを毎日つけて比べる。
- 合言葉は昨日の自分に勝つ。
- やり方を説明し、一緒に取り組む。

次の日から取り組むが、講座で視聴した動画のようにキラキラとはしなかった。同じように説明はしたが、どうしても友達を意識してしまう子、計算にイライラしてやらない子などギスギスした雰囲気で終わってしまった。なぜ同じことをしているはずなのに、上手くいかないのだろうか。それから、何ヶ月も同じ話を聞く中で、ようやく一つの答えにたどり着くことができた。それは、手段ではなく目的が大切ということだ。その時にメモしていたのが以下の通りである。

・なぜ百マスがいいのかを伝える
・個人と全体のゴールを示す
・できる子・できない子への声掛け
・取り組む前に気持ちを高める言葉
・できた子にはさりげなくほめる
・伸びた子にはあたたかい言葉を贈る
・何がよいのか具体的に伝える
・個の学びを全体に広げ、つなげる

このことに気付いてから「目の前の子どもたちを伸ばす」という目的をもった上で手段や方法を選ぶようになった。実践をするときには、言葉や語りを大切にしてスタートをすることで、うまくいくことが多くなり、自分の力量の一つとして、身に付けることができた。講座で聞く内容も大事だが、それ以上に、その実践の目的や背景を理解していなければうまくはいかないのである。

おわりに

「教師は常に挑戦者であれ」これは偉大な先輩の言葉である。教師という仕事は安定している。自分で辞めない限りは最後まで働き続けることができる。言い換えれば、手を抜いたとしても辞めさせられることはないと捉えることができる。安定とは良いことのように思うが、安く定められたところで同じように過ごしていても成長はないともいえる。とはいえ、講座を受けては実践し、失敗したことを意識して講座を受ける、そして学んだことを聞いてもらい改善するという繰り返しは簡単なことではない。常に不安との闘いである。ただ、不安とは、今までやったことがなかったり経験していなかったりしただけのことであるため、マイナスに捉える必要はない。むしろ、自分を高める機会であり、プラスの要素しかない。その積み重ねが今の自分でありこれからの理想の自分でもある。

先日の「先生のための学校」では、講座Bを担当した。聞くだけでも学びは多いが、講師として参加することで学びが加速する。講座の後の感想に「加藤先生だからできる実践だと思いました」と書いてあったが、決してそんなことはない。なぜなら、最初からできていないからである。自分の実践を聞いてもらい、アドバイスをもらい。会のあとも、相談したり、校内では話せないことも打ち明けたりして続けたことで今がある。ただ、それだけである。名古屋から大阪まで距離はあるが、それ以上の価値はある。お金も時間も使っているからこそ、聞き方も受け方も取り組み方も変わる。これからも、インプット&アウトプットを継続していきたい。

オンライン講座、対面講座について

鈴木基久

コロナ禍以前の私は学力研の講座に参加するために、新幹線で大阪に出かけていた。「先生のための学校」に参加するため毎月通っていたこともあった。

コロナ禍でオンライン研修会がたくさん行われるようになり、さまざまなオンライン研修会への参加が学びの機会を大きく広げることにつながった。オンラインのおかげで、交通費と往復の時間を費やすことなく研修会に参加できるようになり、自身の成長にとってオンライン研修が欠かせないものになっていると思う。

様々な研修会に参加する目的は、研修会ごとに少しずつ違っている。自分自身の研修会への参加について目的や参加形態とそこで学べたことについて振り返ってみようと思う。

研修会に参加する目的

- 教科指導
- 特別活動
- 指導要領改訂などの最新情報
- 発達支援教育
- 著名な先生の講演
- 教育に関わる幅広い話、情報交換
- やる気を高めてくれる話

私がこれまで参加した研修会の紹介

① 新潟大附属新潟小学校GATA＋
有料講座。各教科で定期的にオンライン研修を実施している。年間の会費を支払えば、申し込まなくても研修会の案内が送られてくるので、いろいろな教科について幅広く学ぶことができる。

② 新潟大附属長岡小 ふらっと長岡
無料講座。コラボ企画があり、教育書の著者の先生の話が聞けるのも魅力的。

③ 学年の島
無料講座。新潟の若手の先生を対象にした研修会で、ほぼ毎月実施されている。次の月の国語や算数の教材研究をベテラン講師が15分ずつ説明してくれる。その後、質疑応答がある。

④ 新算研
有料講座。算数について深く学べる研修会。

⑤ 文芸研・読み研
国語の教材分析について学べる。

⑥ 個別最適な学び研究会
無料講座。東京学芸大附属小金井小学校の加固先生が主宰する研究会。学習指導要領改訂など教育界の新しい情報について学べる。大学の先生や、先進的な取り組みをしている自治体の教育長、教科調査官からお話を聞ける。

⑦ こども発達支援研究会
無料講座。発達支援教育

（ASD, ADHD, LD と学習支援、不登校など）について専門的に学べる。分かりやすい資料がもらえる。

⑧ 熊本大学教職大学院情報教育研修会

無料講座。情報教育についての情報が得られる。ICT を活用した授業づくりについて学べる。コラボ企画があり、著者の先生の話が聞けるのも魅力的。1月には「予習の科学」の篠ケ谷圭太先生のお話が聞けた。

⑨ 授業力アップわくわくオンライン（愛知教育大　志水廣先生）

有料講座。

春夏秋冬の年４回の講座がある。志水先生のお話を聞くと勇気づけられ、やる気が出る。年間会員になるとさらに深く学べる。

参加形態

① オンラインで聞くだけ

オンライン研修では聞くだけの研修会がある。気楽に参加できて情報を得ることができる。一方でラジオを聴いているような感じになり集中力を維持することが難しい。

② オンラインで顔出し

オンライン研修会であっても参加者が１０名くらいで顔出しして参加する研修会だと学び方が変わってくる。質問したいことがあれば質問できるし、感想を求められたり模擬授業に参加したりすることもできる。発言する機会があることで聞くだけよりもずっと集中して取り組めるようになる。

③ メンバーとのオンライン研修

同じオンライン研修でも、参加者がお互いを知っている研修会になると、学べることがさらに多くなる。日常の悩みを相談することもできるし、自分に合ったアドバイスをもらうこともできる。研究会やサークルのメンバーになれば継続的に学ぶことができる。他のメンバーの考え方や実践に触れることで刺激を受けて、モチベーションを高めることにもつながる。

④ 対面講座

オンライン研修では、情報交換はできるけれど、話し手の息遣い、熱量まではどうしても伝わってこない。私は、隔月で『学び合いの会』というサークルに参加している。考えていることを思い切りしゃべりたいという目的を達成するには、やはり対面でなくては難しい。

学力研でも、対面講座を復活させてきている。対面講座では、講師と参加者だけでなく、参加者同士が交流することもできる。また日頃困っていること、悩んでいることの相談もできる。対面講座はオンラインよりも時間と費用がかかるが、対面講座でしか得られないものがある。

最も成長できる研修会は、自分を知る仲間と共に対面で学び、自分の実践についてのフィードバックをもらえる研修会だと思う。学力研の対面講座は、皆さんにとっての貴重な学びの場になると私は考えている。

学力研の講座には、なぜ教育観や人生まで変える力があるのか

大阪　吉田雅直

教師になってから様々な講座に参加してきました。なかには「なるほど」「すごい実践だなぁ」と感心させられるようなものもありました。しかし私の教育観を根底から覆し、教師人生までも大きく変えることになった講座は、後にも先にも学力研の講座だけです。その後、学力研の常任委員にしていただき、二〇二一年度から毎年「一年生講座」も担当してきました。それらの経験をもとに、講座での学びの活かし方について、さらには参加者が学びを活かすことができるような講座のあり方について、考えてみたいと思います。

私が学力研に出会ったのは二〇一九年の夏の全国大会で、当時は二年生の担任をしていました。そこで、久保先生の漢字指導の講座や学年別講座での実践を学び、すぐにでも実践したくていても立ってもいられないような気持ちになったことをいまでも鮮明に思い出します。

そして始まった二学期。私は何かにとりつかれたかのように、国語でも算数でも体育でも、とにかくできることは手当たり次第に追実践していきました。しかも、それがことごとくヒット、というよりもホームランの連発で、たちまち子どもたちの目がきらきらと輝き出し、保護者からも信頼を得ることができるようになっていったのです。私にとってはまさに「魔法」のような体験でした。

しかし、講座を企画する側になったいま、それが魔法でも何でもなく、学力研の講座の力であり、学力研の理論的な「正しさ」が持つ力であることを確信しています。

学力研の講座が大切にしていることは、「いつでも」「どこでも」「だれにでも」できる実践ということです。数ある講座の中には「名人芸」や「超絶技巧」を売りにしているものもあります。確かに「すごい」「こんな授業ができるようになりたい」とは思いますが、「この先生だからできるんだ」「自分にはとても無理」とあきらめてしまい、なかなか実践してみようという気持ちにならないのが正直なところではないでしょう。

その点、学力研の実践は、ちょっとしたすきま時間に「いつでも」できるもの、地域性に関係なく「どこでも」できるもの、そして、特別な知識や技能や経験がなくても、新任からベテランまで「だれにでも」できるものがほとんどです。それは、少しでも参加者の役に立ちたい、何かひとつでもいいから「これならできそう」と思ってもらい、明日から実践してみてほしい、という強い思いを持っているからです。この「いつでも」「どこでも」「だれにでも」できる実践へのこだわりが、参加者の追実践へのハードルを下げ、「やってみたらほんとうに子どもたちが変わった」という体験となり、さらなる学びへとつながっていくのではないでしょうか。

ただし、追実践を行う上でひとつ気をつけたいことは「とりあえずそのままやってみる」ということです。追実践を行うときに「うちのクラスでこれはちょっと無理そうだから、ちょっとレベルを下げて、これ

くらいからはじめてみようか」と勝手な判断で調整を加えて追実践することがあると思います。しかし、その「微調整」が、実はその実践の「本質」を大きくねじまげてしまうということがよくあります。本質を外した追実践では、うまくいかなかった場合、それが実践そのものの問題なのか、それともやり方の問題なのかが判断できなくなってしまうので、修正ができず、実践が積み上がっていかないのです。なので、はじめて追実践するときはできるだけもとの実践に忠実に「とりあえずそのままやってみる」ことをおすすめします。そして、どうしても無理なときは、実践者に相談されるといいと思います。

学力研の講座のもうひとつの魅力は、教育技術だけでなく、その「心」すなわち「本質」を伝えようとしてくれることです。数ある講座の中には、「こうすれば、こうなる」「これさえやれば、大丈夫」といった形で、ノウハウだけを伝えるものがたくさんあります。参加者としては、すぐに使えるアイテムがたくさんもらえるのでありがたいのですが、実際に使おうとすると、講座で見聞きしたようにはうまくいかず、結局「お蔵入り」ということがけっこうあるのではないでしょうか。　これは、「やり方」だけを伝えて、その「心」を伝えないことに原因があると思います。

これに対し、学力研の講座は、「やり方」だけでなく、「なぜ、そのやり方がいいのか」「そのやり方でなければならない科学的な根拠は何か」「そのやり方にこだわることにどんな意味があり、どんないいことがあるのか」ということを必ずいっしょに伝えてくれます。これが、実践に強い説得力を与え、「やってみたい」という実践意欲につながり、追実践を行っていくうちに確信となっていくのです。

私がはじめて受けた久保先生の講座で目から鱗だった「漢字のつぶやき書き」という実践も、ただ単に「この教え方だと子どもたちも楽しいし、定着しやすいよ」というだけの話だったら、「おもしろそうだな」で終わっていたかもしれません。しかし、漢字指導の本質は「分析と統合」であり、それはすべての学習に通じる。それが、「つぶやき書き」だという久保先生の教育の本質をするどくついたお話に大きな衝撃を受けました。そして、「これからは何があっても絶対につぶやき書きで教えよう」と決心し、同僚の先生にも紹介し、保護者にも自信を持って説明できるようになったのです。私も、講座で「マス計算」などの教育技術を伝える時は、「やり方」だけでなく、「なぜ時間を計って一定期間毎日続ける必要があるのか」「なぜ人との競争ではなく、昨日の自分に勝つことを目標とするのか」「なぜおとなりさんと丸付けするのか」という実践の「心」を伝えることを大切にしています。

このように、学力研の講座は、「いつでも」「どこでも」「だれにでも」できる実践、そして「やり方」だけでなく、その実践が何を目指し、何を大切にしているかという「本質」を伝えてくれるものばかりです。しかし、どんなにすぐれた実践も、聞いているだけでは自分のものにはなりません。まずは「とりあえずそのままやってみる」追実践をおすすめします。うまくいかないこともあると思いますが、そんなときこそ、その実践の「心」と対話するチャンスです。本質を外さないように、地道な実践を積み重ねていくことで、少しずつ自分のものにしていくことこそ、実践の醍醐味なのではないでしょうか。

講座での学びの活かし方

学んだことを自分に活かす

大阪　根無　信行

一、講座に参加するときの思い

教室で、職場で、子どもにこんな力をつけたい、学級づくりで悩んでいる、学校ぐるみで取り組みたいことがある、どうすれば・・・など、自分一人ではどうしても前が開けないことが多々あります。そんな場面に出遭ったときは、本を読んだり、もちろん職場の同僚に相談したりもします。けれども、本では、さらに深く知りたいと思ったことをすぐに著者には尋ねられないことや、職場は、案外「同じ職場」という限られた範囲の中での提案になるので、『そうやってはいるんだけどなぁ』という感触のまま、前に進んでいけない場合もあるものです。

そんなときに頼れる存在が「講座」の学びだと思います。私は、本で読んでもっと知りたくなったこと、また職場の中だけでは解決しきれなかった悩みを他の先生方はどうされているのだろう、ということを知りたいという思いで、講座に参加しています。「学級びらき」の講座や、6月頃に行われる講座などのタイムリーなものや、夏休みや冬休みの、時間と準備期間がが取りやすい時期に行われる講座では、学んだことをもとに次にやってみたいことが見つかり、受講した後は、元気をもらって帰ることができます。

二、講座のよさは臨場感

先ほどの内容と重なりますが、講座には講座の形にしかない良さがあります。例えば、「失敗しない学級経営」(仮)、というタイトルの本を読んだとします。そこに書かれてある実践を真似てしようとするのですが、本の活字では自分のイメージの範囲を超えられないので、同じようなことはできても、細かなところまでは再現しきれず、「これであっているのかな」という感覚は拭えません。でも、講座では、音読のさせ方、発問や返答のようすを講師の先生が実際にやってみせてくださったり、実物の教材を見せてくれたりと、とてもイメージが湧きやすく、安心して「次はこうしてみよう」と思うことができます。これが、講座だからこそのよさ、臨場感なのだと思います。

学んだことを、少し時間を置いて実際に実践するのは自分ですので、よりイメージの描きやすい形で覚えたり身につけたりできると、正しく子どもたちに返せます。講座でレジュメをいただいて、講師の先生が特に強調されているなと感じた部分は、メモをとったり、追記したりすることで、自分に合った資料となり、自分の実践に取り入れやすくなります。実際に授業をされた講師の先生がされるお話は、リアルで分かりやすく伝わってきます。時間があれば、すぐに質問ができるのもありがたいところです。もちろん、本もテーマに沿って詳しく記されているので、何度も読み直すことができるということや、時間に制限されないことは、いいところです。講座ではお話を聞きながら、同時に、自分のクラスや職場を思い浮かべながら、ここでこうしたら・・・など考えながら自分の学びにしていると思います。

そうすると、講座の内容も、自分にもできそうなことか、「この先生だからできてい

るのだろうな」と考えられることか、なんとなく感じることがあります。そんなときに、自分ができそう（自分の学級や職場に合ってそう）なものを、選びながら学んでいけます。また、この先生がこうするためには、それまでにどんな準備や手立てをしておられるのか、何をねらってこの作業を組み入れられたのかもうかがうことができれば、自分にもできることなのか、できないことなのか、も分けて学びに活かせるのだと思います。

三、今自分が学びたがっていることか

漠然と「学びたい」と思う気持ちだけでは、参加した講座の学びを活かすことって、難しいのかなと思います。何のために、どんなことを学びたいのかが決まって、そのことを学べると思える講座が見つかればそれに参加する。その視点で参加すると、学びを活かせると自分は思っています。学びにならない時は、講座がどうなのか以上に、自分の講座に求めるものがどんなものなのか、が大きいと考えます。

一方、数は少ないかもしれませんが、学びにならない講座もないわけではないと思っています。

例えば、講座で伝えられることに汎用性がない、子どもの課題にそっていない、というものです。（公立学校の一教員として講座に参加しようとしての思いです。）特殊な研究指定校の実践報告であるとか、学級人数が大きく違うとか、今の学校では物理的にできない、あてはめることができない実践を講座で伝えられても、学ぶことは難しいです。私たち教職員は、目の前の子ども、保護者とのやりとりを通じて、子どもを見取り、子どもやその集団につけたい力を見つけて、手立てを打っていきます。６年生の学力調査テストの結果が、他県と比較して低いからといって、タブレットを使った個別学習の実践を講座で紹介されても、目の前の子どもの課題から出発していないので、教師自身がその学びを活かすことにはならないでしょう。

また、その人しかできないことを伝えられても、「すごいなぁ」「いいなぁ」で終ってしまうこともあります。学力研で以前から言われている、「いつでも・どこでも・だれでも」できる実践で、その効果がなぜ出るのかの根拠もきちんと示して伝えてくれる、そんな講座からの学びは大きいと思います。

官製研修が学びにならない、というわけではありませんが、自分が受けたいと思うサークルの講座や、組合の教研などは、「当たり」が多いのは事実です。それは、数年後、学力調査テストがオンラインになるから、その活用講座をします、誰か担当から参加してください、とか、中学校区で一貫校を目指すため、小中合同道徳の指導法を統一します、講座を開きますので全員参加願います、とかいうのではなく、実際の授業をされた講師陣が、子ども発信の現場の課題を具体的に取り上げて、伝えてくれる内容になっているからだと思います。

講座に参加して、研修記録として報告を出すのが目的ではなく、お話を聞き、学び、感想を書きたくなるような、そんな講座が増えてほしいなと思います。

自分にとって学びの多かった講座では、風化しない実践、すぐに使えなくても頭や資料に残っているものがたくさんあります。

講座での学びが自分に活かされ、その結果として、子どもたちの力をつけることに返していけるようにしたいと思っています。

学びの多い「講座」とは何か　～4つの特徴

図書　啓展（ずしょ　ひろのぶ）大阪みなみ学力研

●学びの多い講座とは何か

自分にとって学びの多い講座とは何でしょうか。

第一に、自分が「ぜひ聞きたい」と思う講師の講座を受けた時です。

小学校教員として駆け出しの頃、初めて5年生の担任をしました。

そのときにボス格の1人の女子が私の提案を拒否し反発し出してから、彼女に同調する女子が次々と生まれ、女子の指導に悩むようになりました。

打つ手が裏目、裏目に出て、夢の中にまで彼女たちが現われるのです。

そんなときに河瀬哲也先生の「人間になるんだ」という実践記録に出会いました。

そこで展開されたエネルギッシュな取り組みと子ども集団の変革に、非常に感動しました。同時に、クラス全体を引き上げることによって、女子たちも変革できるのではないか、という思いが募ってきました。

ありがたいことに京都で河瀬哲也先生のされる講座があることを程なく知り、参加しました。

そのときのお話は、子どもたちのつながりが深まり広がる作文（つづり方）教育です。

その学びと共に、いやそれ以上に印象に残ったのは、実は河瀬先生の**「気」**です。言葉では表現しにくいのですが、教育者としての熱量やエネルギー、包み込むような雰囲気です。

実際、講座に対面で参加すると、同じ空間・空気を共有することで、その講師の**「気」**を感じることは多いのではないでしょうか。そしてやる気やエネルギーをもらうのです。それこそが私は講座に参加する大きな意味だと思います。特に、オンラインでなく対面講座での参加で実感します。

第二に、今自分が抱えている問題の解決につながりそうな講座を選び、自ら学びに出かけたとき、学びの多いものとなります。

先の女子の指導に悩んでいるときに、学力研の前身「落ちこぼれをなくす研究会」との出会いもあったのです。

正確に言うと「講座」ではありませんが、3学期に「落ち研」のサークルに出かけ、そこで天野憲一郎先生や枡谷雄三先生、雨越康子先生らとの出会いがありました。

私は「落ち研」の人たちに自分の悩みを打ち明けてみました。「落ち研」の実践にも、クラス全体で学力づくりに取り組むことでどの子も伸びる、という柱があります。

河瀬先生の実践・「気」と「落ち研」の人たちの良きアドバイスを参考にして学級づくり立て直しの方針が確立しました。

① 「読み・書き・計算」への取り組みをゆるがせにしない。

② 班活動を活発にして、女子たちも班員としてのつながりを広げる。

③ サッカーなど女子たちが関心のあるものをクラス全体で取り組み、彼女たちを「表」に出す。

④ ボス格の女子への個別的接近を強める。

⑤ すべての基本として「どの子も、先生や仲間に認められたい、ほめられたいと望んでいる」と肝に銘じる。

方針がはっきりすると、私は学年初めのような新鮮な気持ちで実践できました。取り組みの様子は、毎日学級通信で知らせていきました。

そのまま6年生に持ち上がり、さらに発展させ「読み書き計算を学級づくりの中心にすえる」という取り組みを大きな柱にすることで、見事に二人の女子グループは解体され、落ち着いたクラス、学び合うクラス集団へと変革されたのです。

私は毎回サークルに実践と子どもたちの様子を書いて持っていき、レポートするようにしました。そのことは子どもたちが変わるために本当に大きかったと言えます。

●主体的に学ぶということ

つまり次のことです。

学びの多い「講座」の第三は、自分自身が自ら主体的にレポートや報告することなのです。

自分のやっていることをまとめ、考察し、人に伝える。インプットではなくアウトプットする。そして意見やアドバイスをもらう。話し合う。これ以上主体的な学びになることはありません。

自分の思いをまとめ、伝えようとすると、「学び」のステージは何段も上がります。私たちは人に伝える段階になって、まさに真剣に学ぼうとするものです。

ぜひ若い先生方には自ら講師になったり、レポーターになったりすることを数多く経験してほしいです。

主体的に学ぶという点では、次のこともはずせません。

自ら「講座」の主催者になる。

これが、第四に学びの多い「講座」です。

自分が「学びたい」と願う講師先生に直接依頼し、聴きたい内容もすり合わせて講演会や学習会を企画し、運営するのです。

私もこれまで数多くの講演会や講座を企画し運営してきました。

講演会や講座の準備や運営では様々な役割があります。チラシ作成。宣伝。参加者組織。受付用紙や感想文用紙・領収書作成。講師接待。会場設営。掲示。受付。会計。書籍や資料販売。司会。写真。内容の記録・・・。

何でもいいのです。何かひとつ担うだけでも「学びの構え」ができます。会場への到着時刻からして早くなるのですから。講座や講演会に主体的に取り組むことです。

主体的に学んでこそ「学び」が大きいということは間違いありません。

●これ余談なんですけど……

数多くの講座・講演会・研究会などを主催して、成功したものや失敗したものの中から生まれた私の教訓を紹介します。

イベント成功の3原則

① いい企画

② 早い宣伝

③ 手堅い組織　（参加者を名前でおさえる）

イベント運営の3原則

① 時間厳守

② 参加者本位

③ 次につなげる

詳しくはまた機会に紹介しますね。

講座での学びの活かし方
～活かせる「学び」と、活かせない「学び」～

加印　いろえんぴつ　岸本　ひとみ

■活かせる「学び」のある講座とは

○講師の熱量が伝わるとき

私が毎回感心しながら聞いているのが、久保齋講座です。彼は常に熱い。変なたとえですが、学力研の「松岡修造」です。あの熱量には毎回圧倒されます。何とかして、自分の実践の優れた点を伝えようという意志が明確なのでひきこまれてしまいます。

時おり言い間違いをしながらも、懸命に子どもたちにとって何が大切なのかを語りかけ、自分の言う通りに実践していれば、絶対だいじょうぶだと思わせる力があります。

何が彼をそうさせているのかを考えれば、さらに聞く側のスタンスも真剣になります。それは、子どもたちの学力低下や、人間関係の貧しさを、授業の中できたえ、整えていくことができると確信しているからです。今の教師にとって、学力づくりと学級づくり、授業づくりとが、同時進行でできるという実践は、たいへん魅力的です。

なかなかな自分の学級がうまくいっていなくて、悩んでいる時、授業づくりと学級づくりは二律背反するものではないと、すとんと落ちるだけの語りをしてくれるのが、久保さんの講座の良さです。あの熱量が直接伝わる人数の参加者で聞けば、翌日からの実践が楽しみになります。

○子どもの変容が見えるとき

あちこちの講座で、いろいろな講師の方の実践を聞くのですが、やはり、子どもの変容が伝わってくる講座は、魅力的です。動画で紹介される子どもたちの様子や、板書の変容、ノートの書きぶりの豊かさなどが提示されるのです。日々授業と格闘している者にとっては、こんなノートにするには、どうしたらいいのだろう?とか、授業の様子を見て、真剣に討論している様子が紹介されたら、自分の学級でもあんな場面が生み出せたらと思うのは、教師の性です。

講座の冒頭に、動画をポンッと見せられて、衝撃を受け、講師の話をひとことも聞き漏らすまいと、メモを取り続けることもあります。（学力研では、岡本美穂さんがこのタイプです。）

公開発表会でも、授業の様子を参観した後に、参加する分科会や交流会を決めるのは、どうしたらあんな子どもたちに育つのかと、感心するからです。

○できそうな実践が紹介されたとき

ある研究発表会で、講師授業が体育館でありました。すばらしい内容で、子どもたちの発言も豊かでした。でも、小学生に80分もの授業になってしまったのでした。これでは、ふだんの自分の実践には活かせないと思って、少々ひるんでしまいました。

やはり、少しがんばれば自分もできるかもしれないと感じるような内容でないと、なかなか真剣には受講できないというのが、本音です。日々、雑務に追われ、丹念な教材研究もできず、あがいている身にとっては、身近な実践の方が、翌日に活かせると感じてしまいます。

■活かせない「学び」の講座とは

○「お仕着せ」が見えるとき

担当者に責任出席が要請されて、子どもたちを自習にして、泣く泣く参加する研究発表会や講座のほとんどがこれです。講座担当者も、自分のスタイルではなく、あれこれ干渉されたり、制限があったりして、楽し気に講座が展開されないのです。

何だか、淡々と話していて、参加者の方をあまり見ていないし、芝居のシナリオを聞いているようなのです。講師も、いろいろ気苦労があるのでしょうが、いかにも年次発表だから仕方なくやっているという、お仕着せ感が伝わってしまうと、ついつい眠くなってしまいます。

そういう時は、最後の感想に正直にそれを書いて帰ってきています。だって、せっかく子どもたちをほっぽって、小1時間も車で走って、大あわてでかけつけた参加者に対して、あまりに失礼ではないですか。時間がもったいないと思いますしね。

○失敗例が紹介されないとき

何だか、美しく整えられて、講師の人間味が感じられない講座も、あまり感心しません。美しく整っていても、実はこんなエピソードがあって、現在はこんなに整っているのです、と紹介されたら、共感することができます。

前段の「活かせる学び」の、できそうな実践とは逆です。学校ぐるみで実践して、3年間でこんな成果が出ました、と滔々と話されると、とたんに聞いている側は、「無理……。」となってしまいます。

こういう講座の時も、感想に、そこに至るまでのステップを紹介してほしかった、という感想を残して帰ってくるようにしています。

■経験年数を重ねると

若い時には、何でも「これは活かせそう。」「これもステキ。」と、あちこちの講座や研究サークルを渡り歩いていたおかげで、体育、音楽、図工などでも、少しはましな実践ができるようになりました。

でも、最終的には、「読み書き計算」の実践サークルである、学力研に落ち着いたのです。なぜかというと、国語と算数の授業は、毎日あるからです。日々の授業の中で、子どもたちに豊かな言語感覚を身につけさせたり、数概念を獲得していくステップがリアルに見ていられたりするのは、とても楽しいことです。また、授業の中で、お互いに助け合いながら、課題にチャレンジしている姿には、こちらが励まされます。

今は、1年生担任。学力研の講座のおかげで、課題のある子への対応や、コグトレを授業に取り入れるなど、子どもの変容が見られれば、多少指導要領からはみ出ていても、気にせず実践を進められるようになりました。最終的に、成長した姿が見られればそれでいいのだ、と思えるようになりました。

経験だけにあぐらをかくのではなく、若い方の実践講座に参加して、その瑞々しい感性に、自分の子どもへの接し方を反省することができるのも、老化して鈍化した自分の感性にとっては、とても大事な機会だと思えます。いくつになっても、学び続けられるのは、このサークルにおかげです。

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載　76

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長　岡本　美穂

公開授業を終えての感想

深澤先生より

（1）　感想　学校ぐるみ実践へ

　2年前の担当からの流れが良かった。自分ごととしていく「学校づくり」

守破離　リード・サポート・バックアップ

他の先生方の顔が輝いていた。報告が前回3人だったのが今回は10人ほどになっていた。全体の先生の底上げができている。岡本が授業しなくてよかった。妬みが出ない。

（2）　報告について

　より洗練されていた。数値出したのが良い。伝え方が良くなっている。

（3）　授業について

　発表会にしないためにどうすべきか。教材解釈を教師がしているかどうかで、子どもたちの言葉を聞き取り、練り合うことができているか変わる。

（例）

A児：一人前を辞書で調べたら・・・・

B児：一人前は自分の中で一番と決めている。村一番は、人との関わり合いの中で一番になる。

という発言。子供の育ちが出る。ここに気がつけるかどうかが大事。追発問の意味がわかっていないので、そこをみんなでまた考えていくべきでは。

久保先生より

（1）　感想

　国語で学校づくりに。コミュニケーション、成果として出ていた。全校250人の学校生活をあげた。↓子供の集団の力をあげた。普通の学校では、活動を活発にすることはなかなかできない。子供集団の質をあげた。子供が変わってきているのが実感しているのか？腑に落ちているか、どうか・・・わかってくれている人が何人かいることで広がる。

（2）　授業について

　最後は教師がしめる。教材解釈が曖昧。良く発言しているのは9人ほど（何度も）中間層以下が論に入れるようにするために↓のれていない子供が言えるようにする。

心の動き・やさしさに伝わる。

このままでは、ついてこれなくなるので、論点の整理をする。引き上げる感覚が大事であり、その行為がない。もう一度議論にのせるため短くしゃべる。難しい、わからないということも言葉で伝えられる子供に。追発問は論点を整理する。自治的かどうかに関わる。

（3）　3学期に向けて

　よりステップアップする。

授業　↓　テスト

この間の自学・自習がほったらかしになっ

ている。自学と共同の力を使いながら行う。ゴールに向かって自らが学べる子供達に↓
自治

岸本先生より

昨日は、とてもすばらしいものを見せていただきました。6年生もですが、新教材の扱いに興味があったので、後半3年生に参加しました。

私の視点はいつも、課題のある子がどう学習しているか、です。教室に掲示してある描画や習字を見れば、だいたい課題のある子がわかるので、その子をじっくり観察しています。ところが、6年生も3年生も、ほとんどわからないのです。掲示物も、学習の様子もでした。課題のある子への対応に苦しんでおられる先生には、福音になると確信しました。

これは、徹底した基礎基本を鍛え上げてこられた賜物だと、あらためて感じました。

岸本裕史さんが、鍛えれば仮性低学力時も伸びると、ずうっと言っておられたのを目の当たりにしました。

ただ、岸本裕史さんは、学校全体で基礎基本の徹底にまでは至らなかったので、校区ぐるみで底上げにはならなかったのです。

岸本さんと同年齢で但馬に森垣修さんという先達がいて、陰山英雄さんの山口小学校の実践モデルのひとつになった静修小学校の学校ぐるみ実践、を都市部の学校でやってのけたのが弥刀小学校でしょう。ということは、学校規模に関係なく、どこの学校でも、意図的に取り組めば低学力は克服できるということです。

ひとつ心配だったこと。みなさんの勤務時間はどうなっているのか、です。とか言ってる私も、早朝5時から学級通信を作っても、教材づくりをしても、子どもたちの変容が楽しくて仕方ないので、疲れはあまり感じないので、人のことは言えませんけど。(笑)きっと、みなさん働きがい、やりがいを感じて、楽しく働いておられるのでしょうね。何とも羨ましいことです。

次回は、久保先生にいただいたアドバイスをお伝えします。

■弥刀小学校でのあゆみ

弥刀小学校	担任	校務分掌	研究教科
2018年 1年目	3年生	研修部　児童会　小中一貫担当	算数 低中高3本
2019年 2年目	1年生	研修部　児童会　小中一貫担当	算数 低中高3本
2020年 3年目	2年生	研修部　小中一貫担当　児童会	国語 低中高3本
2021年 4年目	4年生	学力向上支援コーディネーター　小中一貫担当　児童会	国語 全員公開授業2回
2022年 5年目	国語(6年) TM担当	学力向上支援コーディネーター　小中一貫担当　児童会	国語 全学年
2023年 6年目	5年	学力向上支援コーディネーター　小中一貫担当　児童会	国語 全学年
2024年 7年目	国語(6年) SE担当	学力向上支援コーディネーター　研修部長 小中一貫担当　児童会	国語 全学年

考える力をつけるための授業の組み立て方⑱

選択させ理由を考えさせる

大阪教育サークルはやし　荒井　賢一

AかBかの二者択一の問い。

これは、子どもたちに選択を迫り、その選択の理由を考えさせるためにある。

どちらかを選び、その理由を自分で考えて書くからこそ、他の子の理由に意識が向くのである。

授業プラン「中庸の是非」・後編

【板書】

がんばってもいい。

しかし、

がんばりすぎてはいけない。

（葉　祥明『三行の知恵～生き方について～』（2009.12 日本標準）より）

「みなさんは、この考えに、賛成ですか。反対ですか。どちらか選んで、理由も書いてみましょう。」

途中で、賛成・反対の数を挙手で確認し、数分後、賛成か反対かを明示してから理由を発表させていく。

【子どもたちの賛成理由】

① がんばりすぎると、べんきょうでは、ちゃんとかんがられないから。

② 練習などをしすぎると、ぎゃくにくるってしまったり、つかれてしまうし、がんばりすぎて体調をくずしたら本当にやらなきゃいけないときにがんばれないから。

③ 同じことをがんばりすぎるとあきるし、つかれるし、休けいをとらなければ効果は二分の一になってしまうから。

④ かぜを引いたりしてしまい、気づかないうちに親に心配をかけてしまうかもしれないから。

⑤ がんばることだけにしゅうちゅうしてしまうとそれだけを考えてしまって失敗するかもしれないから。

⑥ がんばりすぎると、そのダメージが返ってきて、逆効果になってしまうから。

⑦ ゆう先すべきものはがんばることではなく体の体調だから。発表会の前日にがんばっても体調をくずしてしまえば水のあわのようなものだから。

⑧ がんばりすぎて、人にあわせたりして、自分のいけんをいえなくなる。

⑨ 長時間やってもだらっとしていると、40分間しゅうちゅうした人よりもみにつかないから。

⑩ がんばりすぎると、一生できなくなるかもしれないから。（例）スポーツ選手になりたい人が大ケガをして、なれなくなった。

【子どもたちの反対理由】

① 努力が裏切ることはないから。

② 勉強などはやるだけ自分の得になるから。

③ がんばったぶんだけどりょくはむくわれるからいっぱいがんばってもいい。

④ 自分のたいりょくは自分がわかってるから自分ができるところまでやったほうがいい。

⑤ むりしてもやらなければいけないことはある。

⑥ 学校のかだいや、今日中にぜったいや

らなければいけないし料は、無りをしてでも、がんばってやらなければいけないから。

⑦ 頑張りすぎるくらい頑張らなきゃできないことがあるから。それでつまずいた人しか分からないことがある。

⑧ がんばりすぎた人にしかみえない世界があるから。

⑨ がんばりつづけて自分の夢をおっていく。がんばりつづけ、どりょくをすればむくわれる。えんぎのれん習を二年やっていたら今年ぶ台のオーディションでうかった。

中庸を教える

「イタリアのローマにある世界最小の独立国バチカン市国にあるバチカン宮殿に、画家ラファエロが描いた「アテナイの学堂」があります。中央にいる2人は、プラトンとその弟子アリストテレスです。万能の天才と言われたアリストテレスが人の生き方について書いたものをまとめたものが、『ニコマコス倫理学』です。」

ここからは、ＮＨＫの「百分で名著」の画像を使う。

勇気ある人・臆病な人・向こう見ずな人の画像を提示。

「勇気のあるのはいいのですが、臆病だったり、向こう見ずだったりしではいけないのです。」

気前の良さ・ケチ・浪費の画像を提示。

「人に気前よくおごる人はいいのですが、ケチだったり、無駄遣いしたりしすぎてはいけないのです。」

節制・無感覚・放埒の画像を提示。

「食べたいものを適度に節制して食べるのはいいのですが、我慢しすぎると無感覚になり、食べたいものを食べたいだけ食べると放埒になります。」

アリストテレスと勇気・気前の良さ・節制の画像を提示。

「アリストテレスは、何事も中庸が大切だと言っているのです。」

漫画家・青山剛昌の生き様を伝える

「この人は誰でしょう。」

右手に持っている紙に、名探偵コナンの絵を提示する。

「漫画家の青山剛昌さんです。」

ここで名探偵コナンを紹介する動画を流す。累計発行部数2億7千部のミステリー漫画「名探偵コナン」。30年105巻にわたる漫画はアニメ化され、さらに27本の映画が製作されてきた。

【板書】物語はどのようにして産み出されるのか。

挙手で予想を言わせていく。

そのあと、約9分の動画で、青山さんが物語を創り出していく様子を紹介していく。

その後、途中途中で流された青山さんの言葉のいくつかを紹介する。

「毎回毎回、前の自分を超えたいですね。俺以外の人が、どんなすごいミステリーを描いても、なんとも思わない。自分じゃないんで。人は人、自分は自分なんで。」

「もう漫画しか描いてないからな。人生の半分以上ですね。人生ささげてやってきてますね。」

この動画の後に、二〇一五年に、体調を崩して入院した時の青山剛昌さんの読者への手紙を紹介し、最後に、「がんばってもいい。しかし、がんばりすぎてはいけない。」に、賛成か反対かを考えさせ、授業を終える。

酒井邦嘉著『デジタル脳クライシス』―ＡＩ時代をどう生きるか（朝日新書）の紹介

金井　敬之

酒井邦嘉氏の主張

著者の酒井氏の主張は次の４点である。

・大人も子どもも生活全般でデジタル機器に依存しすぎることに強い危機感を覚える

・ＡＩでバラ色の未来が来るわけでもなく、無理をしてデジタル技術とつきあおうとする必要はない

・ＩＴやデジタル機器に頼ると自分の頭で考えなくなる

・デジタル機器に「使われる」ことなく、主体的に「使いたいときに使う」「使うべき時とき使わない」ことが重要

その主張の根拠となるキーワードは以下の５点である。

Ⅰ書きかキーボードか

アメリカの大学生を被験者とする実験で、１５分の講演のメモをキーボードと手書きでした２つグループに、講演の内容をテストした。手書きのグループのほうがよくできた(有意差があった)という結果が出た。

キーボードのグループは、手書きより速く情報をメモできるので、講演の内容に対して受け身的になりやすく、手書きグループは、その内容の要点をまとめてメモしていたから手書きグループの結果がよかったのだと分析している。講演の内容を自分で咀嚼したり補って考えたりする手書きグループの成績がよかったということである。

同じ理由で、記者会見でよい質問するジャーナリストが減ったのは、キーボードでメモする人が多くなったからだと言われている。

Ⅱ紙かデジタルか

スウェーデンの実験では、大学生に紙とパソコンのモニタ画面で同じ情報の理解度を調べる実験をした。

紙のグループのほうが優れていたという結果が出た。さらに、ストレス度を測ると、モニタ画面のグループのほうがストレスは高かった。紙のほうが情報を理解するのに負荷が低かったからだろうと分析している

ノルウェーの１５～６歳を対象とした実験でも紙の有用性が認められている。

「効率がよい」「便利だ」「得だ」「楽だ」といった価値観は教育には非常に逆効果となる。人間の脳はそのような価値基準で動作していないので、一見便利なツールを使うことで、「脳機能を働かせない」という全く正反対の方向に誘導すると酒井氏は言う。

また、スケジュールを想起するテストの実験でも、タブレット群と手帳群では、手帳群のほうが正答率は高かった。

昨今、連絡帳を自分で書かずに、教師が子どもたちのタブレットに送信する学校が増えていると聞く。子どもの忘れ物が多くなったのではないかという教師の実感は正しいと思う。

マンガを読ませる実験でも、見開き２ページずつ（紙のマンガに多い）を見せるグ

ループと1ページずつ（スマホのマンガに多い）見せるグループでは、2ページずつ見せるグループのほうが、ストーリーの記憶、視覚イメージ、共感性が高かったと報告されている。

Ⅲ脳の可塑性

脳の可塑性については、多言語の修得が思春期あたりから困難になるという「臨界期仮説」が否定され、大人になってからも十分可能であること、ヨザルの手指のトレーニングの実験でニューロン（脳の神経細胞）が発達したこと、縦横無尽に張り巡らされた道を走るロンドンのタクシー運転手の海馬が大きくなっていることなど、大人になっても脳は使えば使うほど発達することがわかっている（筋肉もいくつになっても発達すると言われている）。

Ⅳマルチタスク

「スマホ脳」という書籍では、マルチタスクは集中力を低下させ脳は効率よく働かないと書かれているが、酒井氏は、マルチタスクを評価し、マルチタスクができるからこそ、人は（動物も）危険回避ができるし、運転や楽器の演奏もできる、小学校での先生の話を聞きながらノート（メモ）を取ることを禁止している

ことを誤った指導法だという。これは、子どもの発達段階による指導であり、小学校高学年、中高大学に上がるにつれて話を聞きながらメモができるように指導することであると思う。

酒井氏のいうマルチタスクと自分がイメージするマルチタスクはちがう。自分の考えるマルチタスクは、電話をしながらパソコンを打つラジオを聴きながら勉強をする、スマホを見ながら食事をするなどで、楽器の演奏や自動車の運転などはシングルタスクだと思う。酒井氏も相性の悪いマルチタスクもあると書いているが。

Ⅴ非認知能力を伸ばす

最後に酒井氏は、デジタルクライシスに耐えうる非認知能力について少し触れている。非認知能力は、学力研でいう「見えない学力」である。

非認知能力の中でとりわけ重要なのは、好奇心だという。能動的な好奇心こそが非認知能力の核心であると。

電子機器ではなく、楽器などの道具、囲碁将棋、カードゲームなど、読書など、従来からあるもので好奇心や創造力を育み、自分の脳を働かせることが重要だそうだ。

ＡＩを使いこなす力より、ＡＩを使わない力（自分の脳で考える力）を養うことが重要という。

おわりに

考えてみれば、人にとって「便利なもの」「楽ができるもの」（人が身体を使ってすることを代用してくれるもの）は、人がもつ機能を衰退させるというのは、ワープロ機能と漢字の書く力や自動車の普及と足腰の筋力低下などの例を出すまでもなく、当たり前のことである。自分の脳や身体の代わりに機械や機器がしてくれるのであるから。

『スポーツジム車で行ってチャリをこぐ』という川柳（２０１８年サラリーマン川柳大賞）がある。おもしろい川柳だと思うが、スマホで脳トレをするのと同じ図式なのだろうか。

デジタル機器が人の脳に代わって働いてくれるのだから、脳が働く必要がなくなる。

デジタル機器は脳の危機なのである（言葉遊びをしている場合ではないが）。

学力研　第18期 先生のための学校⑤　報告

李　詩　愛

【講座A】根無信行先生

「安心して『書きたい』と思える授業のために」

今の子どもたちは、書く力が弱いと感じる。「書けない」には、二つのパターンがある。「書く」作業ができないことと、「書くことがわからない」ということである。読めない子というのは、書けない子なのである。読むよりも書くほうがレベルが高い。書く力をつける取り組みとして、①漢字学習②語彙増やし③ふりかえり④連絡帳一行日記⑤ノート指導⑥要約がある。

レベルの高い「書く」を求める前に、読む・漢字などの言葉を増やす取り組みを行い、書くことへの抵抗を少しでも減らし、みんなが安心して書くことができるようにしている。

《受講者の感想》

・子どもの言語能力の低下に歯止めをかけたいと日々感じているので、今日来て、自分の感覚がまちがってないと感じました。

・根無先生の書く力をつけるという根本的な推察、共感します。少しずつ、少しでも、毎日続けることで書く体力をつけていって何だか書けるようになっているってことがすごいなあと思いました。

【講座B】加藤英介先生

「学びがつながる社会の授業づくり」

教室から飛び出す子とどうつながるか？子どもたちの「やりたい」を叶える。気になる児童の好きなことを学級活動の中に入れて授業をファシリテートする。社会科の学習においても、見通しを持つことが大切。そのために予習課題でスタートする。単元を通した学びのセットで子どもたちが気になったことを深めていく。一人ひとりが自分に合った学び方を選び、取り組んでいる。

《受講者の感想》

・加藤先生の子どもが興味を持ったり、学びたいと思った方向を叶えるための手立てをされているところが、とてもすごいと思いました。どの子も一緒に学ぶ場にいられるという形が理想的でした。

・社会科でも子どもの参加のハードルを同じにすることなど、とても勉強になりました。子どもたちの疑問や気になったことに答える、解決するということが信頼や授業へのおもしろさになると思いました。

【講座C】学校長　久保齋先生

「予習展開による授業づくり」

算数を教えたときに、学級が荒れたり、集中しないのはなぜか。子どもをA・B・C・Dに分けるとする。Aがよくできる。Bが普通。Cが仮性低学力児。Dが特別なニーズが必要な子。Aの子は先生の話を聞かなくてもいけてしまう。そうしないためには、先生問題を出すかどうかにかかっている。独自の問題を出すことは教師の特権。創作類似問題を出せば子どもは自然と集中するようになる。手作りだから子どもたちはこっちを見る。

Cの子たちを助けるために予習をする。今までは、できない子には復習ばかりだったけど、できないからこそ予習である。これが教育改革。課題をもって授業に参加するということが大切に育てなければならない態度。社会の中で有能な人とは、仕事をする前に準備をする人である。やることに対する束縛を与えないといけない。教えないとできない。

久保先生のお話のあと、「ごんぎつね」の模擬授業で予習の仕方を学びました。

《受講者の感想》

・予習があってから授業をするからこそ、子どもたちの学びが深まることを学びました。私自身予習をさせるということを考えられていなかったので、今回予習の重要性、教師のオリジナルの問題など新たな視点を学ぶことができてとてもよかったです。

・今回のテーマ「予習を展開する」ということで、予習をどのようにするか、授業のスタートを全員で取り組むことで同じ土俵に立てるというのは、授業に対するモチベーションにも関わってくることだと感じました。知らず知らずのうちに子ども同士に差をつくってしまっていることってないかな…と自分の授業づくりを見つめ直しました。子どもたちのやる気を損なわないように学んだことを工夫して国語をしようと思いました。

・予習展開を使った学習方法はすべての児童を同じ位置にして学習できる。音読をやらせるではなく、予習するために音読をしてそこから自分の考えを持てるようにしていきたいと思います。今年は担外で使えることは少ないですが、担任に戻ったときに使いたいと思えるものばかりでした。いつも話を聞いて元気をもらってます。また来たいと思います。ありがとうございました！

局長だより　2月

◇学力研最新情報　岸本　ひとみ

1月は「往ぬ」2月は「逃げる」3月は「去る」ともいわれる短い3学期。いよいよ、学年末までの登校日数もいよいよ30日ちょっとになりました。学力づくりでやり残したことを洗い出し、何とか目標に到達できるようにと、日々奮闘しておられることと思います。

■お試しはいかが

一方、新年度にむけて、お試し実践を進めてみるべき時期でもあります。「お試し実践」とは、やってみたかった実践を、ちょこっと取り入れてみる、ということです。

例えば、「先生のための学校」で提案されている、国語で予習展開を取り入れた授業です。1学期、2学期は、いろいろな事情でできなかった予習展開も、3学期ならできるかもしれません。

私は、1年生担任なので、予習展開の授業を始めるのは、早くても11月。今年はまだ予習音読ぐらいしかできていません。そこで「いろいろなことば」という単元から、本格的な実践を始めてみる予定です。「いろいろなことば」は、言語事項を指導する題材なので、1年生の子どもたちにも、わかりやすい予習課題が出せます。

■社会科がおすすめ

予習の練習をするには、社会科がおすすめです。1時間に教科書4ページ分として、そこから予習課題を作って、提示できます。指導内容もはっきりしているので、取り入れやすいです。3年生以上の担任をされている方、ぜひこの機会に試してみて下さい。

■違う学年でも生かせることを

あと2か月ですから、○○発表会や、1年間のまとめの会、などの実践も、子どもたちの成長ぶりがわかっていいとは思います。でも、教師としての力量形成という視点で、新年度からのご自分の糧になることを、進めてみることも大事にしてもらいたいです。

◇事務局だより　岡本　美穂

■　第18期先生のための学校
2月8日（土）オンライン
zoom　無料
https://www.kokuchpro.com/event/9d77ae09ace6017c3ba57e8766d4af4c/

18年目を迎える「先生のための学校」です。18年続くには意味があります。ぜひ、ご参加ください。お待ちしています。

■　学力研・春の大分集会

新年度スタート講座 IN 大分
開催決定3月30日（日）
学力研の豪華講師陣が、大分に！新年度の学級づくり・授業づくり・学力づくりをどう進めればいいか、ズバリ伝授。
どの子もキラキラと輝かせるために学び合いましょう。
対面講座のよさ、それは

「感情が揺さぶられること」

です。講師の「非言語情報」が参加者の感情に刺激を与えること間違いありません。　またお知らせさせていただきます。「まぐまぐ」でもお知らせさせていただきますので、お見逃しのないようにしてください。

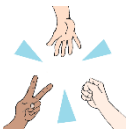
■学力研・新学期スタート講座

https://www.kokuchpro.com/event/b8f162c3b4fe8bc9cc26300452d87373/

毎年大好評の人気講座で、会場を広げて企画しました。ぜひ誘い合ってご参加ください。

日時：4月5日(土)
ここでしか聞けない・見られない・手に入らない講座です。
特典のおみやげつき
テーマ
「1年間を見通した授業づくり・学力づくり・学級づくり」
・できた！楽しい！
学力づくりの第一歩
岸本　ひとみ
・考える力をつけるための
授業の組み立て方
荒井　賢一
・みんなでも、ひとりでも、
できる力を育む学級づくり
岡本　美穂
会場：エルおおさか
参加費：2000円

学力研カレンダー



≪各地のサークル・部会　２０２５年　２月　例会、イベント≫

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしています。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

2/

７	（金）	伊丹学力研	18 時半～　※阪急武庫之荘駅近く	前田 090-9715-3830
１５	（土）	みなみ学力研	9 時半～12 時　阿倍野区民センター	図書 nobu580701@yahoo. co. jp
２２	（土）	大阪教育サークルはやし	午後　エルおおさか	荒井 aik28501@bca. bai. ne. jp
２８	（金）	春日井学力研	18 時半～　レディヤン春日井(JR 勝川駅)	山口 080-6904-1697

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡下さい。

○	いろえんぴつ（加印）	18 時半～　天満南小　なんなん広場	岸本 090-9117-6330
○	持ち方書き方研究会	ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を	前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等　今後の予定 》

○　学力研・春の地域集会　３月３０日（日）　９時１５分～１５時４５分

会場：ホルトホール大分２０１号（最寄り：大分駅）

「　新学期スタート講座（１年間の学級づくり・授業づくりを見通す）　」

講師：久保齋　岡本美穂　荒井賢一　　参加費２０００円

○　学力研・先生のための学校【全６回】

８月２５日（日）　１３時半～１６時【済】　９月１４日（土）　１３時半～１６時【済】

１０月１２日（土）　１３時半～１６時【済】　１１月９日（土）　１３時半～１６時【済】

２０２５年　１月１８日（土）　１３時半～１６時【済】　２月８日（土）　１３時半～１６時

オンライン

対面講座：８月（エルおおさか）・１０月・１月（たかつガーデン）

（詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで）

（講師派遣希望、サークル情報などは　事務局へ　079-426-5133）

※私事ですが、今年の１月で６０歳となり、還暦を迎えました。とはいっても、学力研の常任委員の先生方は、私よりも年上で、しかも元気に仕事をされています。私もまだまだがんばりたいと思っています。（シニア割引で映画が安くなるので、今年から映画を観まくります。）

ご意見・ご感想は下記まで

荒井　賢一　E-mail　aik28501@bca.bai.ne.jp

李　詩愛　E-mail　iwamotoshie@gmail.com

堀井　克也　E-mail　katsuya4k1h9@gmail.com